（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　成　・　・

本論文は明治時代に刊行された日本人のための朝鮮語会話書を対象とし、そこに朝鮮語と対訳の形で示された日本語を近代日本語研究の資料として用いることを意図して、その実態と資料的性格を中心に論じたものである。

本論文は大きく三部に分かれる。まず第一部「総論編」は二章からなり、明治時代を前半（２０年代まで）と後半（３０年代以後）に分けて朝鮮語会話書の実態と性格を論じている。まず明治時代の朝鮮語会話書には現在まで７４点が確認されるとし、これらを一覧する。そして明治１０年代までの朝鮮語会話書が『交隣須知』など、江戸時代に成立した朝鮮語会話書を下敷きとして改編するなど、前代のものを踏襲している面が強いのに対し、２０年代以後のものは新しい時代の要請に応じて新たに編纂されていると論ずる。朝鮮語会話書は当初、外交・通商のために出版されていたが、明治２７年頃には日清戦争のために中国語を加えた会話書や軍人向けの小型のものが多数出版され、さらに３０年代以後は朝鮮半島に移住する日本人のための会話書や、植民地経営を念頭に置いて農業用語、鉄道用語を織り込んだ会話書が刊行されるなど、日本を取り巻く国際情勢に対応したものとなっているとする。そして朝鮮語会話書の日本語も、明治３０年代以後は同時代の口頭語がより直接反映すると共に、東京語を標準的な日本語として示す傾向が強くなったと述べる。

第二部「各論編」は四章からなり、代表的な朝鮮語会話書として『交隣須知』『日韓通話』『日韓韓日新会話』『独習新案日韓対話』の４点を取り上げてそれぞれの日本語の特徴を論ずる。そこでは『交隣須知』が明治時代の三度の刊行の都度、日本語表現を新しいものに入れ替えていること、『日韓通話』が『交隣須知』の影響を受けながらも新しい要素を加えていること、『日韓韓日新会話』が種々の新機軸を導入したこと、そして『独習新案日韓対話』が明治時代の口語表現を最も忠実に反映したものの一つであると述べる。

第三部「資料編」では明治期の朝鮮語会話書７４点について、原本調査による書誌情報、構成、内容、会話の学習上のレベル、日本語の特徴などを個別に詳述している。

本論文は、従来その存在が知られながら、日本語資料としての研究が十分行われていなかった明治期朝鮮語会話書の日本語に正面から取り組んだ意欲的な論考である。先行研究が極めて乏しいだけに、資料の発掘や確認など、基礎的な作業から始めなければならず、これらを活用した本格的な日本語研究についてはこれを今後の課題として残してはいるが、今回発見された６点の新資料など、学界未紹介の知見が数多く見られ、近代日本語の研究の進展に寄与する独創性の高い論考であると評価される。よって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。